



神戸市教育委員会遺跡分布調査への協力（第3章自治体・NGO等との協力による歴史資料の保全・活用事業）

新谷, 和之

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 5(平成18年度事業報告書):102-103

(Issue Date)

2007-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002269>



神戸市教育委員会遺跡分布調査への協力

2006年3月20日から29日にかけて、神戸市北区にある遺跡の分布調査を行った。今回調査したのは、天正寺山城・天正寺廃寺（淡河町本町）、古寺山廃寺（有野町唐櫃）の3箇所、静剛（神戸大）・新谷和之（大阪市大）の2名が調査を担当した。

以下、調査の成果を順に報告する。

天正寺山城

当遺跡は淡河城の北に位置し、淡河城攻めの際に羽柴秀吉方が築いた付城であると言われている。

城は、標高約230m地点に中心となる曲輪を設け、その北西に小規模な曲輪を付属させた構造であり、極めて小規模である。北西方向の曲輪のさらに北西には2条の堀切が設けられており、北西の尾根からの侵入を阻む。

城の南西斜面には、幅2.5mの縦堀が3条平行して設けられている。いわゆる畝状空堀群である。これは戦国期の山城に多く見られる遺構で、戦国末期に横堀が発達するにつれて使用されなくなる、と一般的には言われている。特に、織豊系城郭ではこうした防御施設は用いられない。

遺物としては、瓦と石灯籠が確認でき、いずれも中心曲輪の中央部に位置する祠に伴うものである。城郭に関連する遺物は、表面観察では確認できなかった。

当城の遺構は標高230m地点にほぼ収まる形で存在し、それ以外のピークは城郭として利用されなかったようである。淡河城をピンポイントでおさえることに特化した構造であると言えよう。

防御面では、天然の斜面を主体とした防御がなされ、それ以外の防御施設は未発達である。発達した横堀や虎口など、織豊系城郭に見られる防御施設が一切確認できない。一方、戦国期の山城に見られる畝状空堀群を用いた点は興味深い。周辺の城郭や、当該期の羽柴方の付城と対比することで、その意味を考える必要がある。

天正寺廃寺

天正寺城の南の谷部にあったとされる寺院跡である。遺構としては、まとまった面積を持つ削平地が一つ、その北にそれよりも狭い削平地が一つ付属する。前者は丁寧に整形されており、遺物も多く確認できるが、後者は削平が甘く、遺物もほとんど確認できない。当寺院の建造物は前者の広い削平地に集中していたと思われる。

この広い削平地では、礎石や仏像の頭などの寺院に關係する石材が、表面調査で多数確認できる。また、水溜遺構と想定される方形の石組や、石垣なども残っている。

この他、寺院遺構ではないが、寺院跡の東斜面に溜池の跡と思われる大規模な窪みが三箇所確認できた。さらに、炭焼釜の跡が二箇所あり、うち一つは、現状で焼土が確認できるほど保存状態のよいものである。これらは寺院とは直接関係がないかもしれないが、当地の土地利用を考える上で重要な遺構である。

寺院の南西には、有馬氏の墓所がある。ここには、有馬氏の墓石以外にも多くの墓石があり、これらも寺の性格を考える際に大きな指標となり得るものである。

古寺山廃寺

当遺跡は、古寺山（標高633.8m）を中心に築かれた山岳寺院である。当遺跡については、過去に中心部の調査（『神戸市北区 古寺山遺跡と多聞廃寺址概要』北神地区多聞廃寺址調査団・六甲山麓遺跡調査会 1996年）が行われており、本調査では、その時に見つかった遺構を再確認し、他にも遺構があるかどうかを検証することが課題となった。

調査の結果、寺院遺構であると思われる平坦地は、既に知られていた三箇所以外に七箇所見つけた。それらは大小様々であるが、比較的広い平坦地は、ピークから少し離れた位置にあり、平坦地の縁には、平坦地を造成する際にわざと削り残して土塁のような形にした遺構が見られる（尾根

を整形して土塁状にしたものもある)。このような立地と土塁ラインの存在から、当寺院は、比較的まとまった面積が確保でき、風などから建造物を守ることでできる場所に建造物を築き、土塁ラインで保護した、と考えられる。山のピークには平坦地を造成しないのである。

平坦地は古寺山山頂付近に集中しており、その他のピークでは確認できなかった。現状を見る限り、全山にわたる広い寺域を想定することは困難である。

遺物としては、山頂の南と東に位置する二箇所
の平坦地（いずれもまとまった面積を持つ）から、寺院に関連する石材が集中して見つかった。山頂南の削平地は前回の調査で確認され、面積が広く、礎石などがみられることから本堂と推定されていたが、東の削平地はそれ以上に広く、石材も豊富である（石積も見られる）。いずれが本堂であったかは分からないが、両方とも当寺院の中心的な場所であったことは間違いない。

その他、寺域の西側尾根部で五輪塔を確認した。当寺院の存続年代を考える上で重要な遺物である。

（文責・新谷和之）